

2023年8月10日(木)

コンテンポラリーバレエ『RAIN』を観て

校長の夏の観賞報告その2。7月30日、初台にある新国立劇場で『RAIN』というモダンバレエを鑑賞して来ました。この作品は、イギリスの小説家であり劇作家でもあるモーム William Somerset Maugham(1874-1965)が1921年に発表した『雨』という短編小説をモチーフに、舞踊・美術・音響を融合させた公演でした。W.S.モームと言えば、私のような年代からすれば高校や大学での「英語」のテキストでお馴染みであり、私自身も大学1年の授業で扱った書物で、短編小説の傑作として名高い作品です。

小説は、宣教師である主人公が訪れた南島の孤島での西洋人と現地の人々とのやりとり、閉鎖的な島での文化的衝突をシニカルに描いた作品です。

本舞台では、ステージ上に、雨雲や島、人間関係を象徴するように真っ暗闇の中に無数の黒い糸が垂れ下がった10mもある立方体の装置があるだけです。その糸の間から数本の腕だけで演じたり、上半身やダンサーが出てきたりと、象徴的に演技が行われました。さらには、雨音や電子ノイズのような音響が舞台を演出し、ダンサーの感情とフィットして観客を巻き込んで盛り立てていました。

終演後には、作品を手がけた唐津 絵理さん(愛知芸術劇場エグゼクティブプロデューサー)の司会で、鈴木 竜さん(DaBY アソシエイトコレオグラファー)、岡見 さえさん(舞踏評論家、公立女子大学准教授)による約30分のシアタートークがあり、作品解説や公演への意気込みが語られました。少し難しい部分もありましたが、普段観る機会の少ないジャンルだけに、トークのお陰で一段と内容理解を深めることができました。

また、トーク後には舞台の写真撮影も許可され、客席の場所によって見え方の違う四角い「雨雲」を楽しむこともできました。未知なる体験と感動の一夜となりました



参考図書

W. S.モーム, 西村 孝次訳(2015)Kindle版『雨』グーテンベルク 21, 242KB.

校長 石飛 一吉